

授業を進化!

思考を深化!

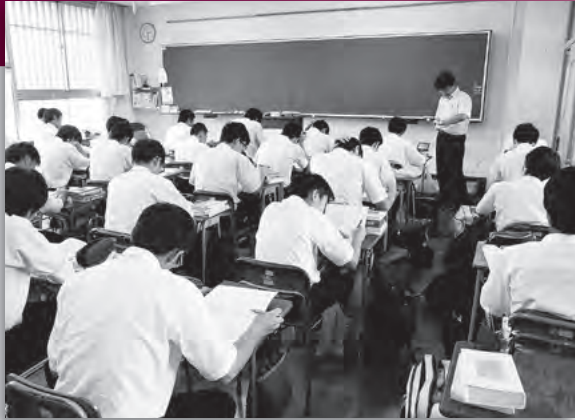
実践 アクティブ・ラーニング

現代文

過去の学習内容と行き来する 活発な議論の中で、 深い読解を実現する

●1年生「現代文」の授業。情報学者で東京大学名誉教授の西垣通氏の「ネットとリアルをあいだ」を、この授業から全4時間で読み解いていく。1回目の今回の授業は、本文全体を通して読み、筆者の主張を読み取ることを目指す。(P.29に授業デザインを掲載)

14:15 本文を通読する

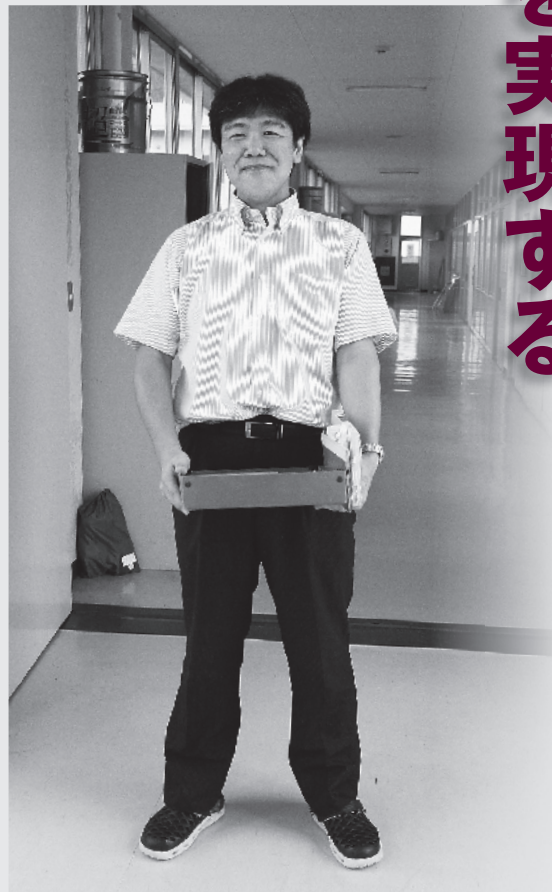


段落ごとに生徒が交替しながら、本文全体を音読する。全26段落を10分程度で通読完了。「『筆者は何を主張したいのか』を説明してほしいのだけれど、考えを整理するのに何分必要?」と黒川先生から尋ねられた生徒が「3分ください」と返事。クラスの全員がまず自分で考えて、それからペアで話し合った。

「生徒の議論」が中心の授業で 教師は論点の整理に徹する

1年生の現代文の授業で、黒川治彦先生が実践するのは、過去の学習内容と関連させながら、より深く、多角的に読み解いていく学習だ。9月上旬に行われたこの授業では、教科書の評論の内容を深く理解するために、夏季休業中に課した評論の読解問題が、思考を活性化するツ

黒川先生のアクティブ・ラーニング



栃木県立宇都宮高校
黒川治彦 くらかわ・はるひこ

教職歴19年。
同校に赴任して11年目。1学年担任。
アクティブ・ラーニングの実践は20年目になる。

栃木県立宇都宮高校

○剛毅で高潔な人物の育成を目指す「瀧の原主義」に基づき、「全教科主義」「学業プラスワン」を実践。自己実現を果たせる高い知力・豊かな情操を養い、社会のあらゆる局面で課題解決を図れる資質を備えた人材を育成する。

○設立 1879(明治12)年

○形態 全日制・通信制/普通科/男子

○生徒数 1学年約280人

○2016年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東北大、東京大、東京工業大、一橋大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ263人が合格。

○URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/usunomiya/nc2/>

14:35 複数の評論を読み比べる



夏季休業中に課した評論の読解問題のプリントを生徒に返却。「夏季休業中に読んだ評論で、教科書の評論と関係するものが思い浮かぶかな?」と問うと、約3分の1の生徒が挙手したので、夏季休業中の課題を3分ほどで見直しさせた。そして、教科書の評論と関連しそうな内容をグループで確認しながら、筆者の主張を改めて検討した。

14:30 内容を発表する



指名された生徒が前に出て、重要なキーワードを板書しながら、筆者の主張を説明。聞く側の生徒は、説明の納得度を拍手の大きさを評価する。黒川先生は、小さな拍手だった生徒にその理由を聞くと、「自分が重要だと思った語句が盛り込まれていない」などと理由を述べ、協働的な深掘りが進んだ。

ルとして使用された。

授業では、生徒が段落ごとに教科書の本文を交替で音読し、全体を通読。その後、黒川先生は生徒に「筆者の主張は?」と問いかけた。指名された生徒が説明すると、ほかの生徒から「今の意見では、教科書に書いてあることをなぞっただけでは?」「重要なキーワードは盛り込まれていないけれど、うまくつながっていない」などの指摘が入る。その度に、黒川先生が「みんなはどう思う?」「この言葉は外せないようだね」などと、論点を整理し、発表者と聞く側の生徒を橋渡ししながらクラス全員の読みを深める。

そうして、筆者の主張をつかむために正確に理解するべきキーワードを確認したところで、授業は大きく展開する。夏季休業中の課題として取り組んだ評論を、教科書の評論を深く読み解くための材料として、並行して読み比べていくことになったのだ。「ここまでに出てきたキーワードを念頭に、夏季休業中に読んだ評論をもう一度ざっと確認してみよう」という黒川先生の言葉で、生徒たちは教科書の評論と夏季休業中に取り組んだ評論を読み比べ始めた。

「1つの物事を考える時に、あえて別の角度から考えることが大切であると、本校ではすべての教科の中で生徒に訴えています。ですから生徒も、複数の評論を並行して読む意味を十分理解しています。そうした授業を続けていくと、2、3年生になった時、『今日の授業に関連して、

自分が前に読んだ本の中にこんなことが書かれてあった』など、教科書に限定することなく、生徒が率先して過去の学びを持ち出し、自由に議論できるようになります」

複数の評論を読み比べ、語り合いの中でさらに理解を深める

教科書、そして夏季休業中の課題と複数の評論を照らし合わせた生徒たちが、グループでの議論を経て、さらにクラス全体での討議を続けた。「自薦でも他薦でもよいので、どんな意見を出していこう」と黒川先生が呼びかけると、それに応じた生徒たちが「ネット社会で内面的なものがないがしろにされているという主張が、この2つの評論に共通している」「この評論での『内面性』と、この評論での『身体性』は、言葉の印象は違うけれど、実は同じ意味なのでは?」「この2つの評論では、『身体』という意味が全く別の意味で使われている」などと意見を出し合う。別の角度からの読みによって、理解が一気に深まっていく。

授業の佳境とも言えるおおよそ十数分間、黒川先生は、生徒の意見を整理し、議論を促進することに徹する。明らかに文を読み間違えた意見が出た時も、即座に否定せず、ただ整理してその意見を全員に提示する。すると、ほかの生徒から「それは違うのでは?」と指摘が入る。

「教師が正解を言えば、『先生が言うのだから



黒川先生が「評論を読む意味は、そこで理解した視点や考え方を、別の場面で使えるようになること」など、現代文の学びの普遍的な意味を生徒に語る。残り1分程度で、生徒が教科書と夏季休業中の課題を突き合わせながら、自主的に今日の学びを確認し合った。



数人の生徒が、複数の評論を読み比べたことで分かったことを踏まえて、教科書の評論の筆者の主張を発表。黒川先生が「今の指摘はとても重要。では、夏季休業中の課題の中に、別の視点でアプローチしている評論がなかったかな?」と、さらにグループでの議論を促す。それらを踏まえて、最初に発表した生徒が再び内容を整理した。

間違いない」と生徒は考えることを止めてしまいます。しかし、生徒同士であれば、本当に正しいかどうか、最後まで気が抜けません。生徒に議論を任せるからこそ、学びが深まるのです」

思考の活性化・深化への配慮

生徒が自分で気づくための最小限の問いを追究

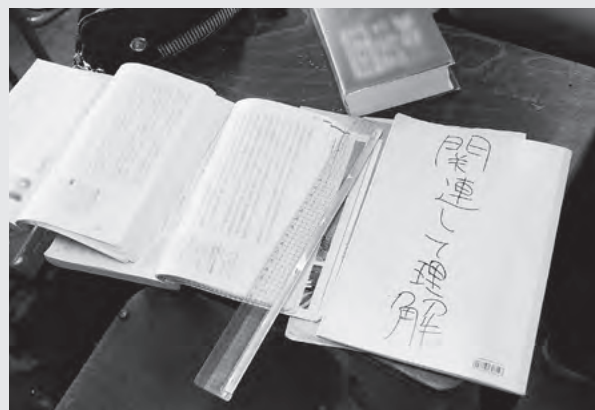
アクティブ・ラーニングの根本は言語活動だが、だからといって、グループワークありきではないと黒川先生は考える。

「大切なのは生徒が能動的に、深く考えることです。それが実現できるのであれば、講義形式の授業でも構わないでしょう。ただ、生徒が自分の考えが深まったことを確認する絶好のアウトプットの場合、グループワークであることは事実です」

思考の活性化につながるグループワークの実現には、教師の役割がより一層重要になる。

「分かっしてほしい」という教師の思いが強すぎると、生徒が理解していることまで説明してしまい、結果、生徒の授業に対する熱を冷ますこととなります。生徒は自分で考え、自分で語り、そして認められたいのです。生徒の考えを引き出すため、教師の問いは最小限にとどめる。今回の授業でもたくさん我慢しました」

今回の授業で、キーワードの1つである「コ



黒川先生は、授業中に「学びの意味」をよく口にする。この日、先生が語った「異なるものを関連させることで、多角的に考え、深く理解できる」というメッセージに共感したある生徒が、その言葉を自分のノートの裏に大きく書いていた。

「コミュニティー」に迫る場面で、ある生徒が人間の存在を「精神と身体から成る」と説明した。そこで黒川先生が問う。「それは自分1人で行くられるもの?」。生徒が「いいえ。周囲に影響されながら……」と答えた次の瞬間、ほかの生徒たちが思わず「ああ……」と声を漏らした。まさに、最小限の問いかけで生徒の思考が活性化したのだ。

場づくりへの配慮

間違った答えの価値を生徒に理解させる授業力が求められる

生徒主体の議論を授業の中心とするために

授業デザインシート

【教科・科目】国語・国語総合（現代文）

【設定時数】4 時間中の1 時間目

【分野・単元】評論

【本時全体の目標】筆者の意見を捉え、多角的に考察する

【テーマ・作品】「ネットとリアルをあいだ」（西垣通）

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につけさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
本文を音読する	「言葉」に気をつけて、正確に読む。	・技能	【教師】声の大きさや速さに留意する。 【生徒】正確に音読する。	キーワード・キーセンテンスに留意しながら、内容を正確に捉えて読むよう働きかける。	声の大きさや本文に向かう姿勢。
本文の内容を考える	「言葉」を適切に理解し、文脈に即して、筆者の主張の核を把握する。	・思考力 ・判断力	【教師】まずは、自分でしっかりと考えるよう伝える。 【生徒】線引きや図示など、自ら工夫してまとめる。	生徒自身で時間を区切り、集中して考えるよう働きかける。	本文のどの辺りに気を配りながら考えているかを、観察する。
本文の内容を発表し、評価を受ける	「言葉」を適切に理解し、文脈を押さえて筆者の主張を的確に把握する姿勢を、生徒からの評価により養う。	・思考力 ・判断力 ・表現力 ・主体性	【教師】生徒による評価が適切になされるよう進行する。 【生徒】発表内容について確固たる根拠に基づき、自分の考えで評価を行う。	発表内容についてどのような評価をし、その理由はどのような根拠からかを明示させる。また、根拠を持って評価するよう促す。	発表者の態度や内容について、間違っている場合、頑ごなしに否定せず、なるべく生徒同士の発言で解決するよう仕向ける。
読み比べを行う	既読の文章（複数）に改めて触れ、自らが蓄えた知識や教養と関連させて、教科書本文を思考することの面白さを実感する。	・知識 ・思考力 ・多様性	【教師】夏季休業中の課題として既に取り組んだプリントを返却し、個人の記憶を呼び起こす契機とする。 【生徒】自分で考えた跡を振り返り、教科書本文の内容と照らし合わせる。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて考えるよう働きかける。	本文を考える上でキーとなる多様なワードについて、生徒から引き出し、すべてを黒板に書いておく。
読み比べた内容についてグループで話し合う	論理的に文章と文章とを関連づけ説明し合うことで、教科書の本文の読みを深める。	・知識 ・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進捗について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて根拠を持って話すよう働きかける。	本文中に根拠を求め、センテンスを抜き出させるなどして話し合わせる。
読み比べた内容について発表し、評価を受ける	読み比べ、話し合ったことで、読解上焦点をあてた視点(キーワード)から、比較した文章と教科書本文の内容を適切に関連づけて発表する。また、その発表に対し、自らの考えを持って適切に評価する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】司会に徹する。 【生徒】主体的に意見を述べる。	意見を整理しながら、内容が誤っていても教師が答えを提示することはせず、改めて生徒同士で考えるよう働きかける。	生徒の着眼点、そこから考えるべき課題を見て取り、クラスの全員が自己の課題として考えるような雰囲気をつくる。
発表で問題となった点についてグループで話し合う	話し合いを通して、深く内容を理解する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進捗について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	文章内容に照らし、根拠を持って話し合うよう働きかける。	本文中に根拠を求めて話し合っているか気を配る。
話し合いを踏まえ、改めて考えを発表する	自らの思考の深まりとその過程について確認する。	・思考力 ・表現力 ・協働性	【教師】生徒の読み取った内容の変化について整理する。 【生徒】発表内容の変化について過程を明確にして発表する。	状況によっては、思考が変化した過程についての説明を求める。	生徒の発表に集中し、その変化を適切にピックアップする。
まとめる	思考を継続する。	・思考力 ・表現力	【教師】生徒の変化を踏まえ、発問をしながら本時の授業内容を整理し、次時の内容につなげることで、思考の継続を促す。 【生徒】発問に対する自らの考えを述べる。	生徒の気づきを大切にしよう発問を心がける。	生徒たちの現状を踏まえ、長期的な学習活動における本時の位置づけについても触れる。

*黒川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

も、入学後1か月くらいでの授業の雰囲気づくりが重要だと黒川先生は説明する。

「本校の生徒は、プライドを持っていて、だからこそ、人前で間違えたり、否定されたりすることを恐れます。入学後、そうした心持ちを変えたいため、私は、たとえ生徒が間違った答えを言っても、そこに学びの価値があることを丁寧に説明しながら、生徒を肯定することを徹底します。次第に生徒たちは、自分の失敗が周囲を成長させていることに気づきます。そういった雰囲気のでき上がれば、自分の意見に対してクラスの仲間が『表面的に思える』と批判しても、それをアドバイスとして受け止め、次にどうすればよいかを前向きに考えることができるのです」

入学して半年。グループでの話し合いに、まだ積極的に参加できない生徒もいる。だが、そうした生徒に対しても、黒川先生は、「根拠が固まっていないまま、形だけ語り合っても意味はない。自分の考えが固まるまで、焦らずに熟考すればよい」と言う。

「正解がはっきりしている古典に比べると、現代文では自分の読みの根拠が浅いと意見が言いにくいものです。失敗と成功を繰り返す仲間の姿を見て、議論に積極的でない生徒にも少しずつ自信をつけてもらいたいですし、机間巡視では、教科書などへの書き込みをチェックし、生徒の理解を支え、価値ある気づきを拾い上げていきたいです」